

## ◆概況

○和装業況が長く低迷する中、近年では大手小売の過量販売・過剰与信が社会問題化し、消費者の和装不信やローンの規制強化等を招いた。また、昨年来の景気の悪化は消費マインドを急速に冷え込ませ、加えて新型インフルエンザへの警戒感の高まりは今後客足を更に鈍らせそうである。

○現在の和装市況は、「悪いの一言」とする企業が多く、良くなる要素をなかなか見出せず、先も読み難いなど、すぐには手の打ちようがない状況にある。

「今は、組織・財務・業務・工程等の内容を見直し、改革・改善を図る『経営重視の時期』であり、赤字を出さないことに徹するべきである」とする企業経営者もあつた。

○小売販売においては、催事・店頭ともに集客に苦戦する中、高額品の販売不振や上代の下落等から顧客購入額(客単価)が落ち込むなど、売上減少に歯止めがかからず、利益確保も厳しい状況にある。

○流通段階では、前で売れないことに加えて委託方式が色濃く蔓延し、問屋筋の仕入意欲も弱く模様眺めといった状況にあるなど、引き続き減産にかかわらず流通在庫はあまり減っていない。なお、物によっては減産の影響から品薄感の出た商品も一部(三越など)ある一方で、生地を潰すよりも市場で直接現物を買った方が安いといった場合もある。

○しかしながら、物販不振の中にあつて、レンタル分野だけは拡大基調にあり、比較的順調に推移している。今、染呉服の40～45%はレンタルに流れているとの声もあり、今後は物販・レンタルの各々で求められる要素を的確に捉え、それぞれに対応した企画を考えていく必要があるようだ。

## ◆流通・販売

○高額品は売れず、値頃品中心の動きとなっている。以前はただ安ければよかったが、今は安くても質の良い物でないと売れなくなっている。

○着尺単品の売れ筋は40万円前後、セット物では30万円前後や19.8万円といった値頃商品が中心となっている。19.8万円のセットでは海外で染め出した生地を使用するケースもあるという。

○委託の蔓延については、販売リスクが軽減される分、物を見る目が失われるとし、「これでは国内で良い物など作れるはずがない」とする声もある。

○「白生地卸」「染加工問屋」「前売問屋」といった業態の垣根は、確実に低くなり混在化してきている。和装低迷の中、消費者目線に立った価値ある商品づくりを目指すとなれば、より先へ進出したり、より先との提携を図ることは自然な流れかもしれない。

○また、従来の流通に捕らわれず、小店舗ながら全国各地と広く取引する業者もある。安心・安全・迅速な通信・流通網が張り巡る現在では、必要な物を必要な量だけ時間厳守で取り引きできる環境にある。

## ◆生産・商品

○振袖は輸入物に大きく移行しており、丹後産地を相当に圧迫している。また、裏地・小物では輸入物無くしては語れない状況にある。輸入物生地の品質は年々良くなってきており、何の抵抗も違和感もなく使われているのが現実であろう。

○振袖の柄行では、古典柄をベースに糸や色使いの変化を工夫し、「古典リニューアル」をコンセプトとして打ち出していく傾向がみられる。

○インクジェット商品関連では、インクジェット染色後に後加工(手描・型染・金彩・刺繍等)を施す割合が高まっている。

○今年の春先に比べ生糸価が上昇しているものの、販売不振と在庫過多の中にあつてその転嫁は難しく、原料高・製品安がますます進んでいる。

○日本の生糸(国内産繭)については、糸価格の高さ、量の少なさに加え、不良品(B反・AB反)への対処の仕方など、取り組む上での課題はまだ多い。

○今の女性は従来品では袖幅が狭くなることが多いため、仕立て上がりを十分に考慮した生地幅づくりが求められている。

○丹後産地への要望を伺ったところ、「ものづくりの中で組織を如何に工夫していくかを考えてほしい」「京都で手の付けられる(潰しやすい)物が求められる」「白生地はすっきりシンプルで後加工ができることが大事である」「丹後産品がどれだけ売場に並び、今何が求められているかを自ら見て調べていただきたい」「織るだけではダメで、ソフト・サービス面(技術の高度化や依頼対応能力の向上等)に取り組んで常に変革していかないと、衰退・縮小していくばかりである」といった声を聞くことができた。

## ◆西陣メーカー

○帯でも着物同様に、販売不振や上代の下落等から苦戦が続いており、在庫の改善も依然進んでいない。こうした中、値頃品で比較的順調なメーカーも一部あるが、こうした商品が大量に出回ると市場価格の下落に拍車がかかることが大いに懸念される。

○工賃は底にあり、一本幾らの工賃設定も見られる。○帯メーカーの中には、社内に複数の紋紙作成担当者を配置し、新柄発信力の強化と経費節減に努める企業も多い。

○「金銀糸等で、見本の色数に比べ調達できる色数が少なくなってきた」とするメーカーがあつた。

○西陣の織手の平均年齢は60歳代後半で、丹後よりやや高いと思われる。地元西陣における織手の世代切替は困難なことから、「今後、丹後への切替も模索していきたい」とする声の他、「外国人労働者を受け入れてはどうか」との意見も聞かれた。

調査機関：(財)京都産業21北部支援センター  
調査日：平成21年10月22・23日

